

学位論文要旨（修士（理学））

論文著者名 谷部 雅季

論文題目：ロバーツ型局所冪零導分の一例についての考察：核の有限生成性を巡って

k を標数 0 の体とし、 $k[\mathbf{x}] = k[x_1, \dots, x_n]$ を k 上の n 変数多項式環とする。 k 線形写像 $D: k[\mathbf{x}] \rightarrow k[\mathbf{x}]$ は任意の $f, g \in k[\mathbf{x}]$ に対し、 $D(fg) = fD(g) + gD(f)$ を満たすとき、 $k[\mathbf{x}]$ における k 導分という。 任意の $f \in k[\mathbf{x}]$ に対し、ある $l \geq 1$ が存在して、 $D^l(f) = 0$ となるとき、 D は局所冪零であるという。 ただし、 D^l は D を l 回合成した写像とする。 D を $k[\mathbf{x}]$ における k 導分とする。 このとき、 $k[\mathbf{x}]^D := \{f \in k[\mathbf{x}] \mid D(f) = 0\}$ は $k[\mathbf{x}]$ の k 部分代数である。 $k[\mathbf{x}]^D$ の有限生成性の問題は、ヒルベルトの第 14 問題の特別な場合である。 ヒルベルトの第 14 問題は永田 [4] が否定的に解決したが、1990 年にロバーツ [5] は新たな反例を与えた。 その後、ロバーツの結果を利用し、局所冪零導分を用いた色々な反例が構成されてきた。

以下、 $k[\mathbf{x}] = k[x_1, x_2, x_3]$ とし、 $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z] = k[\mathbf{x}][y_1, y_2, y_3, z]$ を 7 変数多項式環とする。 整数 $u_i > t_i > 0$ ($i = 1, 2, 3$) に対し、

$$D = x_1^{u_1} \frac{\partial}{\partial y_1} + x_2^{u_2} \frac{\partial}{\partial y_2} + x_3^{u_3} \frac{\partial}{\partial y_3} + x_1^{t_1} x_2^{t_2} x_3^{t_3} \frac{\partial}{\partial z}$$

は $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]$ における局所冪零 k 導分である。 ロバーツの反例は、 $t_i = t$, $u_i = t + 1$ ($i = 1, 2, 3$) の場合の $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ として与えられる。 ただし、 $t \geq 2$ とする。 より一般に、

$$\frac{t_1}{u_1} + \frac{t_2}{u_2} + \frac{t_3}{u_3} \geq 2 \quad (1)$$

ならば、 $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ は k 上有限生成でないことが知られている [3]。 一方、蔵野 [2] より、 $t_i = 1$, $u_i = 2$ ($i = 1, 2, 3$) のとき $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ は k 上 12 個の元で生成される。 より一般に、不等式 (1) を満たさないとき $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ は有限生成であると予想されている [3]。 しかし、具体的な場合も含めてほとんど解明されていない。

本修士論文では以下の研究を行った。

主結果 1 まず、局所冪零導分の核の生成系を計算するための「エッセンのアルゴリズム [1]」を用いて、蔵野の結果の別証明を与えた。 同様の方法で、(1) を満たさない幾つの場合について、 $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ の核の生成系の決定を試みた。 しかし、いずれの場合も計算機による計算が終了しなかった。

主結果 2 次に、以下の方法を用いて、(1) を満たさない幾つの場合に対して $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ の低次の元を直接計算により求め、 $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ の生成の様子を調べる研究を行った。

代入写像 $\pi : k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z] \rightarrow k[\mathbf{x}, z]$ を $\pi(y_i) = 0$ ($i = 1, 2, 3$) で定義するとき, 次の命題が成り立つ.

命題 1 k 代数 $\pi(k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D)$ は単項式で生成される.

(1) が成り立つとき, $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ だけでなく $\pi(k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D)$ も有限生成でない [3]. そのため, $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ の有限生成性と $\pi(k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D)$ の有限生成性の間に深い関係があると考えられる. そこで, 本修士論文では $\pi(k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D)$ の生成について調べた.

係数が 1 の単項式からなる $\pi(k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D)$ の生成系の中で, 包含関係に関して最小なものを \mathcal{U} とおき, $\mathcal{U}_i := \{x_1^{a_1} x_2^{a_2} x_3^{a_3} z^l \in \mathcal{U} \mid l = i\}$ ($i \geq 0$) と定義する. 以下, $t := t_1 = t_2 = t_3$, $u := u_1 = u_2 = u_3$ と仮定する. $k[\mathbf{x}, \mathbf{y}, z]^D$ の \mathbf{Z}^4 次数付き環の構造などを利用し, 一部で計算機も活用しながら計算を行い, $(t, u) = (1, 3), (51, 100), (33, 50)$ の場合に $\mathcal{U}_1, \dots, \mathcal{U}_6$ をそれぞれ求めた. それにより, 以下の定理を得た.

定理 2 $\#\mathcal{U}_i$ ($i = 1, \dots, 6$) は以下のとおりである.

| (t, u) | $3t/u$ | $\#\mathcal{U}_1$ | $\#\mathcal{U}_2$ | $\#\mathcal{U}_3$ | $\#\mathcal{U}_4$ | $\#\mathcal{U}_5$ | $\#\mathcal{U}_6$ |
|----------|--------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| (1,3) | 1 | 3 | 3 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| (51,100) | 1.53 | 3 | 3 | 6 | 9 | 21 | 21 |
| (33,50) | 1.98 | 3 | 3 | 6 | 9 | 15 | 15 |

なお, $i \geq 7$ に対して, $\#\mathcal{U}_i$ は現時点では不明である.

参考文献

- [1] A. van den Essen, *Polynomial automorphisms and the Jacobian conjecture*, Progress in Mathematics, vol. 190, Birkhäuser Verlag, Basel, 2000.
- [2] K. Kurano, *Positive characteristic finite generation of symbolic Rees algebras and Roberts' counterexamples to the fourteenth problem of Hilbert*, Tokyo J. Math. **16** (1993), no. 2, 473–496.
- [3] S. Kuroda, *A generalization of Roberts' counterexample to the fourteenth problem of Hilbert*, Tohoku Math. J. (2) **56** (2004), no. 4, 501–522.
- [4] M. Nagata, *On the fourteenth problem of Hilbert*, Proc. Internat. Congress Math. 1958, Cambridge Univ. Press, New York, 1960, pp. 459–462.
- [5] P. Roberts, *An infinitely generated symbolic blow-up in a power series ring and a new counterexample to Hilbert's fourteenth problem*, J. Algebra **132** (1990), no. 2, 461–473.